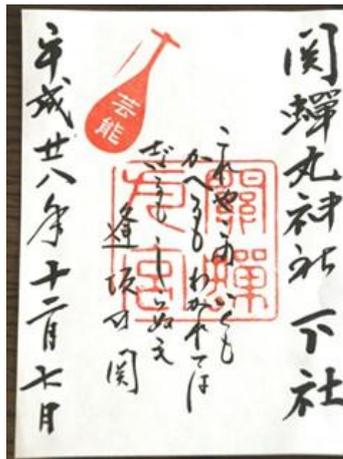


古典の日絵巻 第五巻
日々のなかの古典

関蟬丸神社上社



関蟬丸神社下社のご朱印



琵琶の形の「お守り」

第十号 平成29年1月1日 逢坂関と蟬丸神社

歌枕として名高い逢坂関(おうさかのせき)(山)を、京都市山科区から大津へ向かって歩いて越えた。昔は物資を運ぶ牛車の往来が難儀する峠道だったが、現在は緩やかな坂道となっていて国道1号線が走っている。歩く人の姿はあまり見かけない。

逢坂関は平安時代より鈴鹿関、不破関とともに三関の一つとされ、山城と東国・北陸を結ぶ交通の要衝であった。百人一首「これやこの行くもかへるも別れてはしるもしらぬもあふ坂の関」(後撰集)の蟬丸の歌で有名である。『枕草子』にも(関は逢坂)とあり、『源氏物語』の「関屋」はこの逢坂関が舞台となっている。蟬丸は『今昔物語』巻第二十四には、宇多法皇の皇子 敦実親王(あつざねしんのう)に仕えていた「雑色(ぞうしき)」と記されている。盲目の琵琶の名手であり、源博雅(みなもとのひろまさ)に秘伝の曲(流泉(りゅうせん)・啄木(たくぼく))を伝授したという。また『関蟬丸神社文書』に収録されている『関清水大明神蟬丸宮縁起』や、謡曲『蟬丸』などでは延喜帝(醍醐天皇)の第四王子(皇子)とされており、その生没年・出自は未詳である。

逢坂峠には三つの蟬丸神社が祀られている。一つは峠の頂の少し大津側にある「関蟬丸神社上社(猿田彦命・蟬丸)」で、さらに800mほど下った大津市内に「関蟬丸神社下社(豊玉姫命・蟬丸)」がある。また京都側の大谷にも「蟬丸神社(蟬丸)」があつて、こちらは分社であるという。ともに蟬丸を祀ることから、主に歌舞音曲・芸能の神社として信仰されている。

私が訪れたのは紅葉がまだ残る12月初旬のことで、三社とも境内は森閑としていた。神職が不在のために、滋賀県神社庁(大津市小関町)で関蟬丸神社の宮司にお目にかかり御朱印とお守りをいただいた。その時の「社殿を修復し、祭祀を厳修したい」と熱心に語る若い宮司の姿は忘れられない。